国際活動①－国際がん登録協議会のアジア地区理事就任と IACR 2009 のご案内

津熊　秀明
大阪府立成人病センター　調査部

岡本理事長の推薦、国際がん登録協議会 IACR アジア地区正会員による選挙を経て、2008 年 11 月より IACR アジア地区理事に就任しました。任期は 4 年ですが、今後 2 年間は、タイ・コンケン大学の Surapon Wiangnon 先生と私とでこの任を勤めます。地区理事の主な役割は、地区内の各がん登録の活動と課題を把握し、理事会に報告することとされています。アジア地区のがん登録のネットワークづくりも重要な課題になる可能性もあります。前任の早田先生のようには参らないかと思いますが、全力を尽くす所存ですので皆様方のご支援、ご協力を宜しくお願い致します。ところで、IACR に加盟しているわが国のがん登録は 10 登録で、本協議会加盟の道府県市がん登録事業の 1/3 にも満ちません。国際的な活動に参加することによって得られるメリットはとても大きく、2010 年には IACR の年次総会を日本で開催する事も決定しています。未加入の登録はこの際是非会員となられるようお勧め致します。

2009 年の IACR 年次総会は、米国腫瘍登録士協議会の年次研修と連動して 6 月 3-5 日にルイジアナ州・ニューオーリンズで開催されます。メインテーマは「がん対策の立案におけるがん登録資料の活用、および、パブリックヘルスへの影響」で、サブテーマとして、1）がん登録とがん検診、2）生存率および生存者に関する課題、3）小児がん、4）データの質、5）動向と将来予測、の 5 つが掲げられています。また、年次総会の一環として研修会が、ア）生存率分析、イ）がん負担の将来推計、ウ）データの質、および、国際比較、の 3 つのテーマで企画されています。主催者は、がん登録資料を活用した調査研究がパブリックヘルスにどのように影響を与えたのかを、実例を持ち寄り検証したいと述べています。このニューズレターが発刊される頃には演題申し込みの詳細が IACR のホームページ（http://www.iacr.com.fr/）に掲載されると思います。ニューオーリンズはジャズの発祥地でもあり、積極的に演題を提出し、国際的な活動の息吹に触れることで、遅れをとっているわが国のがん登録の発展に繋げていこうではありませんか。

国際活動②—宮城県における組織型別肺がん罹患率の推移（IACR2008 ポスター発表より）

西野　善一
宮城県立がんセンター

国際がん登録学会（IACR）2008 年年次総会は昨年の 11 月 18 日-20 日にオーストラリアのシドニーで開催されました。今回、口演は 10 のセッションに 62 の演題、ポスターセッションには 94 の演題があり、私は宮城県における 1979-2003 年の組織型別肺がん罹患率の推移をポスターセッションで発表しました。

その概要ですが、結果としては腺癌の年齢調整罹患率（標準人口は世界人口）が多くの欧米諸国で既に認められているように男女とも増加する一方、男性の扁平上皮癌は頭打ちから減少に転じ、その結果 1994-1998 年以降では男性腺癌の年齢調整罹患率が扁平上皮癌を上回りました。また男性の出生コホート別での検討では、扁平上皮癌の罹患率が 1934-1938 年以降の出生コホートで減少傾向にあるのに対して、腺癌は 1929-1933 年の出生コホートで一度増加が止まった後 1939-1943 年以降の出生コホートで再度増加するような傾向を示しました。扁平上皮癌と腺癌で異なる傾向を認めるわけですが、この原因として考えられることの一つとしては 1960 年代に急速に進んだフィルター付きたばこの普及が考えられます。それまでの両切たばこに比べてフィルター付きたばこは喫煙者が深くまで煙を吸い込むため肺の末梢に多く発生する腺癌のリスクを増加させるとされています。これからフィルター付きたばこで喫煙を開始した世代の肺がんの罹患数が増加する時期に入ることから特に今後の腺癌の増加が懸念されるところです。

この発表が最終日恒例のポスターアワードでポスター賞に選ばれ、ボクシンググローブをつけたカンガルーの人形（ハンドパペット）と賞状をありがたくいただきました。プレゼンテーションの時は聴衆も数少なく余り関心を持たれていないのかと思っていまし

たので正直受賞は嬉しい驚きでした。今後は特に男女ともにみられる腺癌増加の原因について分析疫学による検討も加えてさらに研究をすすめることができたらと考えています。

国際活動③—IARC/韓国国立がんセンター共催　地域がん登録国際コースに参加して

松尾　恵太郎

愛知県がんセンター研究所　疫学・予防部

昨年 8 月 22-27 日の 6 日間、IARC/韓国国立がんセンター（KNCC）共催で地域がん登録国際コースが、KNCC で開催された。アジア諸国を中心に計 14 ヶ国から 30 名弱が受講者した。日本からは、国立がんセンター松田智大、丸亀知美両先生が講師として、山形県立生活習慣病センター柴田亜希子先生ならびに筆者が受講者として参加した。(写真)

コースは、講義形式の部分と小グループによる実習形式に分かれていた。講義は、がん登録総論、ICD-O3、ケースファインディング、登録項目概論、多重がん定義、staging、CanReg4 概説、quality control、罹患報告、個人情報保護・倫理・法的側面等、地域がん登録に必要なトピックが網羅されていた。実習は選択形式で、CanReg 4 の使いかた、情報の抜粋の仕方に関する実習は、松田、丸亀、柴田先生が参加された。小グループによる話し合い形式による実習は有効であったそうである。筆者は、がん登録情報の解析法とその応用に関するグループを選択したが、韓国の講師陣によるデータ解析の実例を伴う部分が参考になった。

コースの途中にアジアにおけるがん登録ネットワークに関するサテライトミーティングが挟まれたが、温度差はあるものの IARC/IACR 以外にアジアとしてのがん登録のつながりを期待する向きがあるのを感じた。

本年は中国で開催されるので、参加を検討されてはいかがだろうか。

第 17 回地域がん登録全国協議会総会研究会ならびに実務者研修会を終えて

関根　一郎

長崎大学大学院　医歯薬学総合研究科　原研病理

平成 20 年 9 月 11 日（木）から 12 日（金）にかけて、長崎大学医学部キャンパス良順会館と記念講堂において、第 17 回地域がん登録全国協議会総会研究会ならびに実務者研修会を開催致しました。全国から 272 名にご参加いただき、おかげさまで盛会のうちに無事終了したことをご報告申し上げます。

平成 20 年は昭和 33 年に長崎市医師会腫瘍統計事業が開始されてから、ちょうど 50 周年にあたります。この記念すべき年に総会研究会を開催することができたことは、とても名誉なことでした。放射線影響研究所の陶山疫学部長に副会長をお願いし、私どもの原研病理と放影研、そして、長崎県福祉保健部の面々が力を合わせ、開催にこぎつけた次第です。プログラム作成には国立がんセンターの味木先生にも一役かって頂きました。一昨年の「がん対策基本法」成立を踏まえ、「がん対策基本法施行後の現状と課題」というテーマで、特別講演 2 題、会長講演、2 つのシンポジウムを設定いたしました。前日 11 日午後のがん登録担当者集会では初の試みとして、実務担当者部会と別に行政担当者部会を設けました。

特別講演は、我が国の地域がん登録の牽引役である国立がんセンター味木和喜子先生に「わが国の地域がん登録の現状と展望について」というタイトルでお話していただきました。さらに、長崎県南保健所の土居浩先生に、「長崎における成人 T 細胞性白血病とがん登録」というタイトルでご講演いただきました。土居先生は、長年取り組んでこられた長崎県における HTLV-1 母児感染遮断について紹介されました。

会長講演は、「長崎腫瘍組織登録委員会について-地域がん登録そして原爆研究への利用-」と題し、長崎の組織登録（個人的には病理登録という名称が相応